

画家・放菴 没後50年「越中おわら節」も作詞

この人このテーマ

近代の新南画家といわれる日光出身の画家、小杉放菴（1881〜1964）。今年は没後50年。多才ぶりを発揮した生涯を、研究にはまった郷土史家に紹介してもらった。

マルチな才人にほれこむ

研究舎を主宰・郷土史家

柳原 一興さん(63)

安田講堂に壁画描く

—放菴とはどんな画家

後に日光町長となる日光二荒山神社の神官の四男。15歳の時、日光に住みついていた洋画家、五百城文哉の内弟子となります。

18歳で上京、絵画雑誌の特派員や漫画家、挿絵作家としても活躍しました。酒を飲まない文哉に飲酒をたしなめられると「未だ（酔いから）醒めず」と、その後は未醒を名乗りました。反骨心がありありとわかりますね。

文展と敬われた文部省主催の美術博覧会で1911年から、「水郷」「豆の秋」の2作で連続最高賞を受賞。「豆の秋」は夏目漱石から「あなたかみがある」と激賞されま



した。横山大観らと日本美術院を再興させました。

そして25年、東大安田講堂の玉座の左右に「湧泉」「採果」の壁画を完成させた。洋画の集大成です。

た彼はルーベンスなどの絵を見て、自分の洋画の限界を知ったのでしよう。年号が昭和となる頃はもっぱら日本画を描き、名も放庵、後に放菴となりました。

32年、芭蕉の足跡を巡った奥の細道画冊が名の売れた日

やなぎはら・かずおき 1950年、日光市出身。日光高（現日光明峰高）卒後、日光東照宮に奉職。85年退職後、コンサルタント業。2003年から小杉放菴研究舎を主宰。会員約50人。全国の放菴の足跡を巡るほか、9月初旬の「おわら風の盆」には富山市を訪れ、関係者と交流を深める。13年から小杉放菴記念日光美術館理事。

本画家としての出発点。翌年には安土城摺見寺の襖絵を描いた。日本画家としては、好きなものを自由に描いた印象があります。

—多才ですね

マルチです。富山県の民謡「越中おわら節」を作詞しました。28年に八尾町（現富山市）を訪れた放菴は、料亭で聞いたおわら節に感銘。翌月に新歌詞の「八尾四季」を贈りました。振り付けがついて爆発的人気となりました。放菴はおわらを芸術にまで高めました。

まだあります。クラブを通じて野球やテニスの普及にも力を注ぎました。都市対抗野

球の優勝旗、黒獅子旗は放菴の図案です。銀座の老舗天ぷら屋の店の名の書体が放菴の揮毫だったり、青森の銘酒のラベルが放菴の書だったり。活躍は言い尽くせません。

—なぜ研究舎を

いつかは風の盆に行きたいと思っていました。調べたら放菴の作詞。調べれば調べるほど放菴にはまり、研究舎を立ち上げました。放菴は心に余裕があるんですね。年上の

大観や国木田独歩に対して、君呼ばわりして媚びを売らない。文化勲章も断つたとされ、名誉職は日光の名誉市民のみ。展覧会を前にしても、ダメな絵は落とすと、弟子も取らなかつた。書を頼まれても、本業ではないと謝礼は受け取らなかつた。さすががしいでしょう。

来月20日から企画展

「没後50年 小杉放菴展」が9月20日から日光美術館であります。「水郷」も展示します。多才な活動の一端にぜひ触れてください。

（聞き手・服部肇）